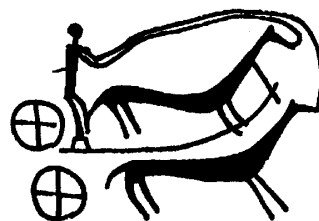


センターニュース

Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No.23



新しいセンター体制がスタート	3
21世紀の北大を開く総合メディア交流棟	3
水産学部の附属施設を利用したフレッシュマン教育	6
6月3日に新任教官研修会	7
TA 研修会開催される	7
総合講義「21世紀の北海道を開く」が開講	12

巻頭言

FOREWORD

学部一貫教育の改善を目指して

高等教育機能開発総合センター長・大学院獣医学研究科教授 前出 吉光

私は本年4月1日付で本センター長に就任いたしました。よろしく願いいたします。

私はこれまで3年間、獣医学部長として小部局の運営に携わってまいりましたが、私が学部長に就任いたしましたときに教官の方々に公約したこと第一は、学部教育の改革ということでした。きっかけは、学部一貫教育開始後、学生の修学態度が極端に悪くなったことでした。学部一貫教育のもとで入学した最初の学生が2年次後半となって学部専門教育を受けるようになったとき、授業担当教官から次々と信じられないような報告が寄せられました。「遅刻者が異常に多い」、「出席率が悪い」、「授業の理解度が低い」等々でした。そのようなことは、一貫教育以前の学生には

ほとんどみられないことでした。一貫教育制度下の学生たちも激しい受験競争をくぐり抜けて日本全国から入学してきたのであり、勉学能力は一貫教育以前の学生と比較しても勝りこそすれ劣るとは考えられません

でしたが、結局、この最初のクラスは実に20%近くが休学や退学するという惨憺たる結果となりました。これは何とかしなければ大変なことになる。これまで「北大獣医学部」として、全国的に大きなクラスの評価を受けてきましたが、それが一転してしまう。私の学部長としての最大の責務は、この状態

をいかに改善するかであると思いました。

原因としてまず考えられたことは、学部一貫教育で1年次から志望学部に入ってしまうため、緊張感が無くなって勉強しなくなってしまうということでした。これは医学部や歯学部の先生方からかつてお聞きしたことでもありました。しかし、私はどうもそれだけではないように感じました。そこで私なりにいろんな機会を利用して当の学生たちと話し合ってみました。その結果、最大の要因は、現在の高校教育のあり方と、本学の初年次教育にあると思うようになりました。「生物や物理を高校で履修してこなかったため、専門科目の授業が理解できない」、「せっかく獣医学部へ入学したのに、1年次には獣医学の授業はほとんどなくて、高校の延長のような授業や、興味の持てない教養科目を受けなくてはならない」、「授業に熱意のない教官、学生の理解などを考えようともせず自分の専門だけをしゃべり続ける教官への不満」、そして「1年次にとにかく多くの単位を取つてしまえば2年次前半は遊びの時間、遊びグセがついてしまって、2年次後半からの学部専門課程が始まっても身体がついていかず、遅刻や欠席をしよう」等々、いずれも、私には予想外の答えでした。

それまで、うかつにも、高校でどのような教育が行われているのか知りませんでしたし、新しい全学教育がどのように実行されているのかも理解していませんでした。私の固い頭の中では、高校では私が生徒であった頃と同様の、そして全学教育では旧教養部と同様の教育が行われているのだろうという固定観念がありました。それだけに学生の答えはショックでした。獣医学の基礎となる生物学を学ばずに獣医学を志望するという、私には理解のできない彼らの行動も、彼らからすれば、北大獣医学部の受験要項では理科は生物、化学、物理から2科目選択となっているのであるから、どれをとってもよいのではないかということです。しかし、私どもが3科目中2科目選択と決めるときは、高校では3科目全ての教育を行っている

ものという前提があつてのことでした。まさか入試で選択しない科目は履修してこない(それでも高校を卒業できる!)ということなど想像もしていなかったのです。うかつでした。もっと私どもの立場を高校に正確に伝える努力をするべきでした。この理科の件に関しては1部局では何らの有効な解決策がなく、入試で理科3科目を必修にすることを検討する程度に止まりました。

一方、その他の事柄について、特に獣医学部を志望する学生が入学後も目的を見失わず勉学に励めるように初年次教育についての見直しを行いました。毎回各教室の教官が出向いて研究紹介を行っていた獣医学総合講義を取り止め、これを獣医学入門コースとして位置づけて、5～6人の少人数の演習形式として、学部内の施設や研究室訪問をするなどの方式に変えました。さらに学部教育そのものが、欧米諸国と比較した場合どのような問題があるかを明らかにするために外部評価を実施し、アメリカやカナダの獣医大学教師から評価を受けました。その結果、学部教育のみならず大学院教育においても様々な問題点が指摘され、現在、それらをもとに改善策が検討され、一部実行されつつあります。この外部評価の利点は、それによって教官の教育に対する認識が少しずつではありますが明らかに変化してきたことでした。学生を大切にしなければ、結局は我々自身が大きな損をすることになるということが自覚されはじめたのです。

そんな中で、突然私は、このセンター長の要職を仰せつかることになりました。着任してまだ2週間が過ぎたばかりであります。この間にセンター関係者からセンターが抱える様々な問題について説明を受けました。どの問題も解決には時間がかかりそうです。しかし、本年度からは全学的な教務委員会が発足し、二期目に入られた丹保総長は、学部一貫教育の改善に強い意欲を示しておられます。私も全力を尽くしたいと思いますので、皆様方の御協力を心よりお願い申し上げます。

センター CENTER

新しいセンター体制がスタート

平成 11 年度から、前出吉光副学長がセンター長となり、新しい体制で高等教育機能開発総合センター（センター）が動きだします。

センターの新体制でこれまでと大きく変わったことは

- 1) センター長補佐体制が決められたこと
- 2) 全学教育科目責任者体制により全学教育カリキュラムが実施されていくこと

の2つです。

センター長補佐は以下の5名です。

- ・山口佳三教授（理学研究科）
- ・植木 子教授（文学部）
- ・岸浪建史教授（工学研究科）
- ・阿部和厚教授（医学部，高等教育開発研究部長）
- ・小林甫教授（生涯学習計画研究部長）

この5名が、毎週1回の定例会議をもちながら、

センターの運営に関わります。

センターは全学教育部，高等教育開発研究部，生涯学習計画研究部からなります。副学長は，この全体の長であると同時に，全学教育部の長であり，山口教授はセンター長代理として全学教育委員会に深くかかわります。岸浪教授は，センターの建物や予算と関連する予算施設委員会に中心的に関わります。両研究部は，北大のこれからを視野に，北大の教育全般と関連して入学試験，高校接続や社会と大学，学部一貫教育，大学院教育などの具体的課題を研究します。

全学教育科目責任者体制は，全学教育のカリキュラムを構成する科目担当を全学的に強化していくものです。各学部に適当な科目責任者をおき，各科目ごとの科目責任者会議をもって各科目の開講の企画・立案を行います。

21世紀の北大を開く総合メディア交流棟

高等教育開発研究部・医学部 阿部 和厚

21世紀の大学は，社会との連携，社会への発信，メディア利用教育をキーワードとしています。これを具体化するために，この度，北海道大学と放送大学との合築棟が実現することになりました。高等教育機能開発総合センター（センター）の建物と附属図書館北分館との間に建築中で平成 12 年度に竣工の予定です。

この建物は6階建てで，1階はエントランスホール，2階はコンピューター教室，附属図書館北分館のマルチメディア学習室，大学の広報センター，3階は外国語教育用マルチメディア教室と

メディア利用講堂，SCS講義室，メディア教材作成室，国際交流集会室，4階は教室2つと高等教育開発研究部と生涯学習計画研究部が入ります。5，6階は放送大学です。この建物は，上が放送大学ということで多くの社会人が出入りし，学生，留学生，社会人相互の教育交流がこの建物を中心に行われます。

1階の広いエントランスホールでは，学生同士，社会人と学生，ときには留学生やその家族を交えての交流風景も見られるでしょう。2階では，大学の広報センターが廊下の西側を占め，大

学の情報を社会人に開く場となっています。北大の広報関係印刷物，コンピューターによる北大の情報検索ができます。

階は，21世紀の北大のメディア交流を実現するための施設，この建物の心臓部です。すこし大きな部屋は，スタジオ型多目的中講義室です。前に広くスペースをとり，後ろに120ほどの座席があります。この講義室で意図したものは，よくテレビでのバラエティショーに出てくるスタジオで，出演者と聴衆が一体となれる形です。たとえば，社会人向けの公開講座で，アイヌ文化を取り上げたしましょう。前の広いスペースでは，アイヌ音楽の演奏や舞踊ができます。また，様々なメディアが利用でき，天井のプロジェクターから，ビデオ，コンピューター，インターネット画像が投影できます。うしろの映写室からはスライド映写ができます。このような公開講座をテレビ撮影して録画ができますし，これをネットワークを通じて学内生中継，あるいは，SCS（通信衛星システム）を通じて全国の大学への中継もできます。また，双方向性の新しい形の授業にも使えます。芸術を主題とした授業などにも威力を発揮します。研究会，学会，シンポジウム，研修にも使いやすい構

造になっています。

隣にはメディア教材作成室があります。ここは生中継の調整室ともなりますし，テレビのデジタル編集，録音，マルチメディア教材作成のメディアラボともなります。教材はインターネット発信できます。たとえば，動画教材をビデオ・オン・デマンド装置により学内配信できます。この隣には，SCS講義室があり，全国ネットでのライブ討論や研究会に利用します。さらに4階には2つの教室があります。その一方には電話回線利用のテレビ会議システムを設置し，この教室とどこかの市町村を結ぶ社会人遠隔授業が行われます。

3階のメディアラボは，学生にも利用してもらってはどうかと私は考えています。情報化社会における多様なメディア利用，ジャーナリズムなどに対応する新しい教育も生まれると予想します。そして，これらを4階の高等教育開発研究部と生涯学習計画研究部のセンター教官が支えることとなります。

交流といえば，3階の国際交流，集会室は，たとえばボランティアによる留学生の家族向け日本語教室などに使われ，キッチンが備え付けられて，食文化を通じての国際交流ができます。ま

た、スタジオ型多目的中講義室を利用すると、民族舞踊もできると思います。その他、この建物は2階がセンターの建物、図書館北分館の建物と廊下続きとなり、学生は授業の合間に直接に図書館へ出入りできます。2階と3階が学生のメディア学習の場ともなります。2階は図書館マルチメディア学習室、コンピューター実習室と自習室、3階はマルチメディア利用外国語教育教室と自習室です。ここで学生は、コンピューター授業、語学の授業、ビデオやマルチメディアによる自習を行います。

こうして、建物全体を概観しますと、まさに総合的メディア交流の場となっています。学生、社会人、留学生、教官、研究者の立体的利用、生き生きとした交流が目に見えよう。さらにメディアを通じて、建物内、学内、地域社会、全国

の大学、世界へと交流・連携が広がる発信型の大学の実現ともなります。

発信型の大学では、著作権と関連して、教材やメディアを自前で用意する必要があります。ここでは、民間放送局と共同研究で16年間、全国を先導してきた北海大学の放送講座教材制作の経験が生きます。

この建物が、21世紀に羽ばたくためには、この建物の心臓部である3階、4階のメディア関連施設に充実したメディア教育支援設備を導入することが決め手です。結構の予算を必要としますが、これらの設備なしには建物が機能しないといっても過言ではないでしょう。

この実現により、北大は、メディア活用教育で全国の大学を一步リードすることになります。メディアにより開かれた大学として発展します。

センター研究発表会開催される

去る3月9日(火)に高等教育開発研究部2階会議室において、本センターの研究発表会が開催されました。これは、専任教員および学内外研究員の研究活動について、広く学内外の方々に知って

いただき、またその内容について討論していただくために毎年3月に行っているものです。今年のプログラムは下記の通りで、高等教育のさまざまな面について活発な質疑応答が行われました。

プログラム

<午前部：生涯学習計画研究部>

諸外国の高等教育と生涯学習(2) ケンブリッジ大学における継続教育(竹内新也,生涯学習計画研究部)
フランス高等教育の新動向(町井輝久,生涯学習計画研究部)

社会との連携による総合講義「大学と社会」の成果と課題 学生アンケート調査及び講師からの聞き取りによる調査から (町井輝久,生涯学習計画研究部)

大学と地域の連携による公開講座 北海道大学と士幌町の連携による公開講座3年間の成果(木村純,生涯学習計画研究部)

大学における職業人教育の課題 「工学教育研究プロジェクト」等北大工学研究科の課題に関する研究(小林甫,生涯学習計画研究部;岸浪建史,大学院工学研究科)

<午後部：高等教育開発研究部>

大学生の授業における態度と数学教師の対策 日本数学会のある調査より (西森敏之,高等教育開発研究部)

情報教育における学生を中心とした授業(高橋伸幸,北海道教育大学函館校;乳井 英雄,函館大谷女子短期大学;小笠原正明,高等教育開発研究部)

米国のアドミッションオフィス その機能と組織 (細川敏幸,高等教育開発研究部;小川悟,学務部入試課)

「大学入試改革の研究会」報告 高校と大学の教育をどう接続するか (小笠原正明,高等教育開発研究部)

コアカリキュラムの視点から見た全学教育(阿部和厚,高等教育開発研究部・医学部)

全学教育 GENERAL EDUCATION

水産学部の附属施設を利用したフレッシュマン教育

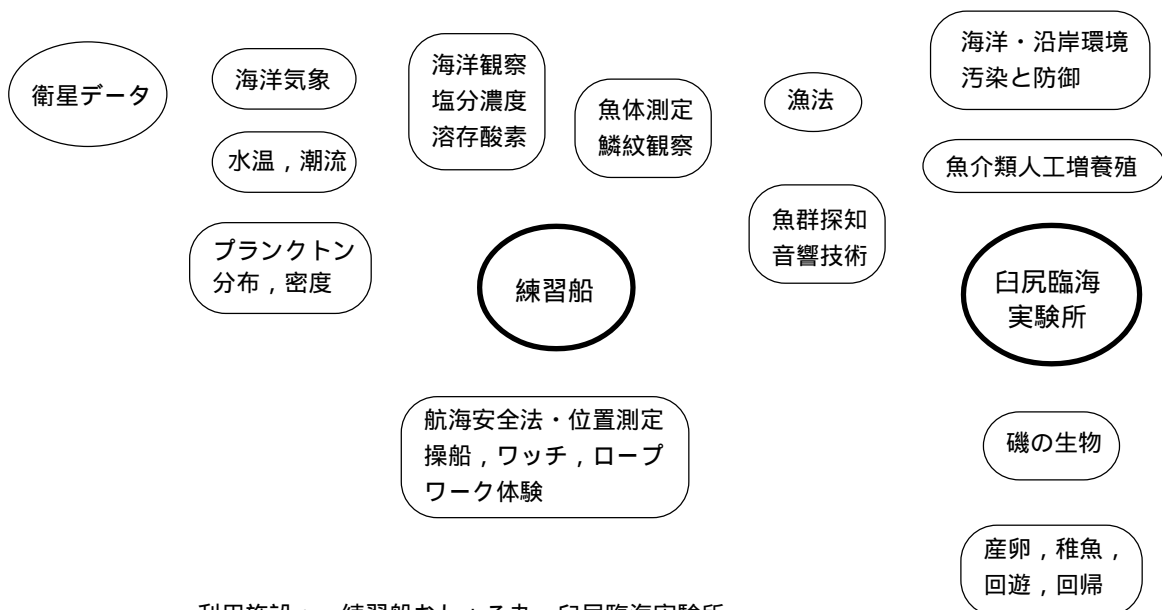
水産学部では、本年9月に附属の練習船や実験所を利用したフレッシュマン教育を実施することにしました。その概要は以下の通りです。

- 1) 附属施設として、本年度は練習船「おしよる丸」と白尻の臨海実験所を利用する。
- 2) 9月9日におしよる丸を室蘭に回航し、10日に学生および関連の教官を乗船させ、「船内体験学習」を行う。12日午前に関館に入港し、同日午後、白尻実験所に行き、「実験・実習体験学習」を行う。14日に鹿部栽培センターを見学し、

夕刻までに札幌に帰着する。

- 3) おしよる丸のベッド数を考慮して、募集する学生は40名、関連教官は10名、協力学生は6名とする。ただし、男女学生の数は、特別な事情がないかぎり制約しない。
- 4) 参加学生は、学生保健に加入していることを条件とする。

図1に、この実習で意図されていることをまとめて示しました。問い合わせ先は、水産学部の高間、上田です。



利用施設： 練習船おしよる丸, 白尻臨海実験所

見学予定： 鹿部栽培漁業センター（案）

日程： 平成11年9月10日～9月14日の4泊5日

9日	10日	12日	12日	14日	14日
函館	室蘭	体験等	函館	白尻	体験等
		練習船			バス

図1. 海の科学：沿岸・海洋からの情報とその利用（仮題）

高等教育

HIGHER EDUCATION

6月3日に新任教官研修会 ？ワークショップも企画？

第2回目の新任教官研修会が6月3日(木)の開学記念日に学術交流会館で行われることになりました。「新任教官歓迎説明会」と呼ばれていたときから通算すると第5回目になります。対象は、昨年6月からこれまでの間に本学に赴任された教官全員です。

今回は、新しい試みとして「北海道大学とは何か？」という統一テーマをかかげて内容を構成することにしました。午前の部では、本学の誕生から現在にいたるまでの教育的経験を簡潔に解説し、現状と課題について議論を行います。午後の部はワークショップ形式とし、学生参加型の授業の開発、シラバス作り、教育評価などについて体験型のセッションを設けることにしました。新任教官以外の方も自由に参加して討論に加わっていただきたいと思います。新任教官以外で参加希望の方はあらかじめご連絡(高等教育開発研究部：西森、電話・FAX：706-2192)下さい。

北海道大学新任教官研修会

日時：1999年6月3日(木)

場所：学術交流会館

<午前の部>

あいさつ

(総長)丹保 憲仁

学部一貫教育の改善を目指して

(高等教育機能開発総合センター長)前出 吉光
北海道大学とは何か？

1)北海道大学の教育的経験？札幌農学校から新制大学まで

(高等教育開発研究部教授)小笠原 正明

2)学部一貫教育体制の現状と課題

(高等教育開発研究部長)阿部 和厚

<午後の部>

3)ワークショップ：北海道大学の新しい教育の在り方について

TA 研修会開催される

TA (Teaching Assistant) 制度の導入により、多くの大学院生が学部教育(全学教育)に参加しています。この制度は広い意味での大学院教育の一貫として、教師になるための重要な実地訓練の場を与えるものです。この制度を有効に機能させるための準備の最初のステップとして、北大では昨年初めてのTA研修会が行われ、のべ55名のTAが参加しました。

TA研修会の具体的目標は、(1)全学教育の趣旨(目的、意義、全体での位置づけ)を理解する、

(2)専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心構え、教育理論について理解する、(3)TA相互の交流をはかる、ということです。

今年3月16日に学術交流会館で行われました。参加者数は、のべ64名でうちわけは、理学(8)、地環(15)、工学(10)、医学(8)、歯学(2)、農学(3)、教育(5)、経済(5)、文学(6)、法学(1)、低温研(1)でした。

プログラムの中の、「3.シラバスの意味と少人数教育の実際について」と「5.実験指導のポイント」では、短い講義ののち少人数のグループに分かれ

での討論および全体での発表討論の形式で行われ、TA たちは活発に討論に参加しました。

終了後に回収したアンケート回答は44通あり、「本日のプログラムの中でもっとも有益であったのはどれですか?」という質問に対し、プログラムの1-2, 3, 4, 5のそれぞれに10通程度の回答があり、その他に討論ができてよかったとするものが4通ありました。その他の質問に対する回答を下にいくつか紹介します。これらを含めて、アンケートの回答を今後の研修会の参考にしたいと考えております。

プログラム

< 午前の部 >

1. はじめに (高等教育: 阿部和厚)
2. 北海道大学の全学教育 (総長)
3. シラバスの意味と少人数教育の実際について (高等教育: 西森敏之, 細川敏幸)

< 午後の部 >

4. 論文・レポートの書き方の指導について (高等教育: 小笠原正明)
5. 実験指導のポイント (講師: 米山輝子)

参加者の意見

アンケート回答

質問: 「本日のプログラム以外で次年度以降取り入れたほうがよいと考えるものがあればお教えください。」

- ・生徒の生の声, 不満など。
- ・実際にあった話で, 成功例, 失敗例の紹介。
- ・みんなで討論する場。
- ・ディスカッションに時間をとれるよう, 1日のプログラムにしても良いと思います。
- ・TA のなかで先生役と生徒役に分かれて何かをディスカスしたり教えたり...etc。

小グループ討論

- ・TA の交流機会。
- ・TA をやっている外国人留学生がかなり多いですから, 次年度以降, この点を考えながら, プログラムに何か取り入れたほうがいいかな。
- ・具体的な目標の中に教育理論についての理解が明示されているが, この点についての明確な説明がなかった。

質問: 「本日のプログラムを良くするためのアイデアがありましたら記入してください。」

- ・もっと活発な雰囲気を作ってくれましたら, もっと面白くなると思います。
- ・具体設定を立て, それについて debate させた方がよりよい idea が出ると思われる。
- ・はやい段階でグループを作る。名前確認のとき番号札を配るとか。
- ・もう少し少数グループでの議論の時間が欲しかった。
- ・理系中心のプログラムという感想あり。文系の先生の話の聞きたい。これは実現して貰いたい。
- ・研修会の予告が漠然としていて, 具体的な中身が分かりにくい。研修会に出たらどういう話が聞けるか, 議論できるかといった, 出席するこ

とのメリットが分かるような詳しい予告が望ましい。そうすることで、TA 予定者以外の学生・教官にもこのような研修会の意義を理解してもらいやすいのではないかと。

- ・今回短い時間であったが、他学部のTA の状況、講義、実習の様子を聞く時間があった。来年以後、教官も含めて学生(TA)間で様々なことを議論する時間があれば良いと感じた。

質問：「その他、コメントがありましたらお書き下さい。」

- ・先生方の熱意が伝わってよかったです。
- ・こういう機会はもっと持つべきだと思う。それと授業のアンケートなどをもって、それをもとに後期の前にも同様の話し合いを設けると、もっと役に立つと思う。
- ・この会も何回もやると皆がなれてきて発言しや

すくなると思う。場が出来上がっていないので、少し盛り上がらなかつただけだと思う。

- ・実際に授業を受ける側にも、今のような話を聞く機会があってもよいのでは？
- ・TA が採用されている講義・演習等を担当している教官の間に、TA とは何か理解が広まっていない。TA の意義、授業・実習の改善等も含めて、多くの教官、スタッフに理解を広めていく手だてが何か必要であろう。
- ・文系と理系を分けてした方がいい。
- ・文系のレポートに対する目標設定とは何か？が、もう少し、討論すべきところだったかも知れません。
- ・グループディスカッションには疑問あり。
- ・最後のディスカッションはシンポジストに対する質問という形式なら発言も増えたのではないかと。

学内外研究員決まる

学内外研究員が下の表のように決まりました。高等教育に関する研究プロジェクトでの活発な活動が期待されます。

本年度（4月1日付け）の高等教育開発研究部の

平成11年度

研究員名簿（高等教育開発研究部）

高等教育開発研究部 25名
(学内 19名)

氏名	所属	専門分野	研究テーマ
佐藤 公治	教育学部助教授	発達心理学	大学における学生を中心とした授業の開発
高橋 宣勝	言語文化部教授	英語教育系	大学における学生を中心とした授業の開発, 論文指導の研究
小林 由子	留学生センター助教授	日本語教育系	大学における学生を中心とした授業の開発
大滝 純司	医学部附属病院講師	総合診療医学	大学における学生を中心とした授業の開発
"	"	"	対人コミュニケーションに関する体験学習のための Simulated Client の養成に関する研究
橋本 雄一	文学部助教授	地域システム科学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
市川 恒樹	工学研究科教授	機能設計化学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
平川 一臣	地球環境科学研究科	地球生態学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
常田 益代	留学生センター教授	美術史及び建築史	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
中戸川孝治	文学部助教授	哲学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
小野寺 彰	理学研究科助教授	凝縮系物理学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
高杉 光雄	地球環境科学研究科教授	生体機能化学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
櫻井恒太郎	医学部附属病院教授	医療情報	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
石川 健三	理学研究科教授	量子物理学	大学入試改革の研究
野坂 政司	言語文化部教授	英語教育系	大学入試改革の研究
長谷部 清	地球環境科学研究科教授	物質機能化学	大学入試改革の研究
山下 好孝	留学生センター助教授	日本語学, スペイン語学	論文指導の研究
寺沢 浩一	医学部教授	法医学	論文指導の研究
岸浪 建史	工学研究科教授	システム情報工学	学部教育におけるコア・カリキュラムに関する研究
新田 孝彦	文学部教授	倫理学	学部教育におけるコア・カリキュラムに関する研究

(学外 6名)

氏名	所属	専門分野	研究テーマ
和田 大輔	帯広畜産大学畜産学科助手	畜産管理	大学における学生を中心とした授業の開発
山舗 直子	酪農学園大学助教授	一般教養	大学における学生を中心とした授業の開発
川村 武	北見工業大学工学部講師	電子工学	メディア利用教育の教材および教授法の開発に関する研究
目黒 和秀	北海道札幌南高等学校教諭	英語教育	大学入試改革の研究
玉田 茂喜	北海道札幌北高等学校教諭	国語教育	大学入試改革の研究
岡元 昭道	北海道札幌東高等学校教諭	理科教育	大学入試改革の研究

教育業績評価の実現へ

教員の教育業績評価フォーマットが平成 10 年度点検評価委員会の教員業績評価専門委員会（福迫尚一郎委員長）のもとに「教員の総合的業績評価について」としてまとめられ、平成 10 年度大学年次報告に印刷されています。教育業績のみならず、管理運営、社会貢献業績もいれて総合的評価をしていくというものです。総合的という意味は、すでにデータベースともなっている研究業績評価も加えてのことです。平成 11 年度には、教育、管理運営、社会貢献業績データベースの構築を開始する予定になっています。

この中で大きな部分を占めているのが、教育業績評価です。福迫尚一郎委員長のもとにワーキンググループがつけられ、高等教育開発研究部の阿部和厚部長を中心にまとめられました。教育業績評価は、21 世紀の大学を展望するなかで重要な課題にとりあげられ、北海道大学の動きは、全国を先導するものとして注目されています。

教育業績評価実現には、大学の点検評価体制ができた平成 4 年からの脈々とした流れがあります。教育評価については、平成 4 年にすでに、教育業績の評価、生涯学習への参加を業績とすることの必要性、教育に関わる研修の必要性が提示されました。その後、研究業績評価の具体化が着々と進められ、データベース化を行っています。このためバランス上、教育業績評価の必要性はさらに明確になり、平成 7 年度には、高等教育研究部の教官を中心に「北海道大学における教育業績の評価法」がまとめられ、ここでは管理運営と社会貢献の業績評価も入れた総合評価の必要性も述べられました。さらに教育業績評価については、平成 9 年度に学生の学業成績評価について調査した際にも、多くの教官からその必要性が訴えられて

いました。この流れで、平成 11 年度によろやく実現されるものです。

教育業績評価は全国の大学の検討課題です。しかし、どうしたらよいのかよくわからないという声を聞きます。これと比較され、すでに実施されている研究業績評価に目を転じますと、大学で行われているものには、実際にはデータの公表です。評価そのものは、分野や評価基準のとり方によって異なります。教育業績評価も基本的にはデータの公開ということになります。ただ、教育に関しては、大学全体で各教員に共通の視点があるはずで、そのデータの評価には、共通の視点、考え方、意識も関連するでしょう。共通の視点を持つためには、教官の教育に関わる研修、いわゆるファカルティ・デベロップメント（FD）が必須となります。幸に、北大では組織的、体系的 FD が平成 10 年 11 月に実施されました。業績評価と FD が教育にかかわる両輪であり、教育業績を評価していくためには、評価の基準を理解するための FD は必須であり、さらに発展させていく必要があります。

独立行政法人化が検討されるなかで、北海道大学の教育の特徴を明確にしていくことが重要となっています。教育業績評価の実施、FD の実施は、北海道大学の将来の発展への関わりを大事にする姿勢ともなります。そしてまた、教育業績、教授法、入試から大学院までの具体的課題を研究することを任務とする高等教育開発研究部は、北海道大学の教育の将来を担う組織として、ますます重要になります。

（以上、点検評価委員会に 8 年参加して、教育、研究、管理運営の改善の方向を探ってきた視点で述べました。阿部和厚）

生涯学習

LIFELONG LEARNING

前年度の公開講座をもとに 総合講義「21世紀の北海道をひらく」が開講

昨年度の公開講座「21世紀の北海道を開く - 今あらためて『自立』を考える -」を基にして、1998年度の総長経費をもとに（研究代表：大場工学研究科教授），その成果を刊行するとともに，総合講義に取り組みます。

北海道では，かつて地域を代表するといわれたいくつかの有力企業が経営危機に陥ったり，地域開発において大きな役割を担ってきた北海道開発庁が統廃合されることが決まるなど，その将来の方向について道民の不安が高まっています。その一方で，エア・ドゥが就航し，北海道町村会が中心となった北海道地方自治土曜講座講座で多くの自治体職員が学習に取り組むなど，新たな「自立」を求める胎動が生まれています。

この講義では，北海道の置かれている現状を多面的，かつ構造的にとらえるとともに，事態をただ悲観的にのみとらえるのではなく，21世紀における発展可能性を明かにしようとするものであり，また，本学が，めざしつつある産・官・学の連携やそのための人材養成における役割も考察し，学生諸君の本学における学習の意義を考える機会にもしようとするものです。

講義計画（金曜日 3校時 13：00～14：30）

第1回：4月16日（金）ガイダンス

第2回：4月23日（金）北海道の歴史と北海道大学の役割（1）札幌農学校など（小林甫，高等教育機能開発総合センター教授）

第3回：5月7日（金）北海道の歴史と北海道大学の役割（2）遠友夜学校など（木村純，高等教育機能開発総合センター助教授）

第4回：5月14日（金）北海道経済の課題と可能性（井上久志，経済学部教授）

第5回：5月21日（金）文化面からみた北海道第（神谷忠孝，文学部教授）

第6回：5月28日（金）地方分権と北海道（川村喜芳，北海道町村会専務理事）

第7回：6月11日（金）北海道における地域医療の未来（前沢政次，医学部附属病院教授）

第8回：6月18日（金）産官学連携による北海道自立戦略（嘉数侑昇，工学研究科教授）

第9回：6月25日（金）北海道における情報産業の新展開（山本強，大型計算機センター教授）

第10回：7月2日（金）21世紀の北海道農業（太田原高昭，農学部教授）

第11回：7月9日（金）海洋新秩序のもとでの北海道自立戦略（廣吉勝治，水産学部教授）

第12回：7月16日（金）北海道社会の発展と人材養成（小林甫，高等教育機能開発総合センター教授）

第13回：7月23日（金）まとめ（小林甫，木村純）

「ボランティアリーダー・コーディネート実践講座」終る

生涯学習計画研究部が参画する札幌市リカレント教育研究会は，札幌市教育委員会と連携し，札幌市内と近郊の大学・高等教育機関とのネット

ワークの形成を図りながら市民の生涯学習における大学の役割を研究することを目的にしていますが，そのための実践的研究の一環として実施され

た「ボランティアリーダー・コーディネーター実践講座」が終了しました。北星女子短期大学、北海道医療大学の協力を得て、NPO法の活用のしかたやボランティア活動に必要なコミュニケーションの方法を中心に講義、実技、討論が行われ、好評のうちに6回の講座が終わりました。受講者は36名、修了者は31名でした。修了者26名が参加した「自主勉強会」が早速組織され、4月15日に1回目の勉強会が開かれます。

1998年度、札幌市リカレント教育研究会と札幌市教育委員会は、この講座も含め、「創業塾」(札幌商工会議所附属専門学校)、「環境問題を考える」(北海学園大学、道教育大岩見沢校、札幌市環境局環境保全部)、「まちづくり実践講座」

(?柳田石塚建築計画事務所、札幌市高等専門学校、札幌市都市局地域計画部)、「高齢社会の『介護』を考える」(北星学園大学、北海道医療大学、札幌市保健福祉局高齢保健福祉部)、「学校をひらく、子どもの明日をひらく」(道教育大学札幌校、札幌市児童福祉総合センター)、「コンピューターネットワークと電子商取引」(札幌大学、札幌市経済局商工部、電子流通促進協議会)など10の講座をも開設しました。これらの実践を基礎に、市民のリカレント教育に対するニーズやリカレント教育の評価や学習経験の活用などのあり方についての研究が継続される予定になっています。

行事予定 SCHEDULE, Apr. - Jun.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
4月	6(火)	クラス担任代表会議	
	7(水)	新入生オリエンテーション	
	8(木)	入学式	
	9(金)	学部ガイダンス	
	12(月)	第1学期授業開始	
	22(木)~23(金)	2年次以上履修届受付	当該学部
	23(金)	追加認定試験成績締切	
5月	23(金)~26(月)	1年次履修届受付	
	上旬~下旬	定期健康診断	
6月	3(木)	開学記念行事日	休講
	3(木)~6(日)	大学祭	休講
7月	23(金)	第1学期授業終了	
	26(月)~8月17(火)	夏季休業日	
8月	18(水)~20(金)	補講日	
	23(月)~9月3(金)	定期試験	
9月	7(火) 正午	定期試験成績提出締切	
	7(火)~10(金)	追試験	
	10(金) 正午 中旬~下旬	追試験成績提出締切 学科等分属手続	当該学部

センター日誌

CENTER EVENTS, Feb. - Mar.

2月

- 2日 ・ (会議) センター長・部長会議
- 8日 ・ (会議) 第23回全学教育委員会
- 12日 ・ (会議) 第12回公開講座専門委員会
- 16日 ・ (会議) 第15回センター予算・施設委員会
- 17日 ・ (会議) センターE棟1階部分改修工事説明会
- 22日 ・ (会議) 第4回センター予算・施設委員会小委員会
- 24日 ・ (会議) 臨時大学院委員会
・ (会議) 平成10年度北海道・大学放送講座事務担当者会議(道教育大)
- 25日 ・ 第二次入学試験(前期日程)
・ 「センターニュース」第22号発行
- 26日 ・ (会議) 第39回センター連絡会議
・ (会議) 第16回センター予算・施設委員会

3月

- 3日 ・ (会議) 第13回生涯学習計画研究委員会

- 6日 ・ 第二次前期日程合格発表
- 8日 ・ (会議) 第5回センター予算・施設委員会小委員会
・ (会議) 全学教育理系基礎科目に関する懇談会(情報エレクトロニクス系)
- 9日 ・ センター研究発表会
・ (会議) 第13回高等教育開発研究委員会
・ (会議) 全学教育理系基礎科目に関する懇談会(社会工学会)
- 10日 ・ (会議) 全学教育理系基礎科目に関する懇談会(材料・化学系, 物理工学会)
- 12日 ・ 第二次入学試験(後期日程)
- 16日 ・ TA研修会
- 17日 ・ (会議) 第24回センター運営委員会
- 18日 ・ (会議) クラス担任全体会議
・ (会議) 第41回全学教育委員会小委員会
- 19日 ・ (会議) 大学院委員会
・ (会議) センター長・部長会議
- 25日 ・ 学位記授与式(学士, 修士)
・ 学位記授与式(博士)
- 26日 ・ (会議) 第40回センター連絡会議
・ (会議) 公開講座担当講師打合せ会議
- 30日 ・ 生涯学習フォーラム「北見・網走地域における大学間ネットワークの現状と課題」

編集後記

高等教育ジャーナル5号が発行されました。その中に、獣医学研究科の藤田先生のディベートを取り入れた実験的授業の論文があります。その授業の対象は、本号の巻頭言で前出センター長が触れている、学部一貫教育開始後の獣医学部の最初の学生たちです。藤田先生の論文には、1回分のディベートの様子がテープから起こされてまるまる再現されていますが、その活発さは印象的です。授業のやりかたによっては、学生は随分変わるものだなと思いました。面白いです。是非お読み下さい。(羽)

センターニュース 第23号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日: 1999年4月30日

発行元: 北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員: 小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・山口佳三

ご意見, お問い合わせは 印の編集委員まで

電話: (011)706-2194; FAX (011)706-4922

インターネット ホームページ: <http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center>